

第四章 平安のターミナルケアに学ぶ

念仏仲間によるターミナルケア

「いろは歌」を中心に、いろいろな死生観を見してきました。この章では、「いろは歌」の時代に発達した臨終作法、およびターミナルケアについて見てみたいと思います。驚いたことに、平安時代の日本では、近づく死は告知され、準備すべきものと認識されました。そこに独自のターミナルケアが発達したのです。

日本のターミナルケアのルーツは、中国、主に唐の時代の道躋どうせいや善導たちにあります。法然が非常に尊敬した善導の『臨終正念訣』や、義浄の『臨終方訣』などの影響を受けて「臨終はどうあるべきなのか」というテーマがとても大きく扱われるようになります。

そうした土壌の中で、まずはじめに天台系の僧侶である恵心僧都源信が、『往生要集』の巻の注の最後に『臨終行儀』を書きます。これが、むしろ今の時代に合うのではないかと思える同行同信の看取り、つまり仲間によるターミナルケアなのです。

源信は、平安時代の九八六年に二十五三昧会にじゅうごさんまいえという集団を結成します。最初は二五人でなく一人でした。浄土教、あるいは『法華経』の教養をベースとして、そこに浄土思想を加味した恵心僧都の考え方を理解するその仲間内で、看護から看取りまでやろうじゃないかということのできた念仏集団です。

二十五三昧会がやっていたことは、念仏とターミナルケアです。通常の活動として、毎月一五日は午後の二時ごろに集まり、明るいうちは『法華経』の勉強、そして夜の七時くらいから翌朝の七時までは夜通しで念仏を唱えていたようです。また、具合が悪くなった仲間がでたなら、往生院やら無常院と呼ばれるところに移し、夕方になるとみんなで集まってその人のために念仏を唱えました。

「治療」と「臨終」に一線を画す

お釈迦さまの時代、インドの祇園精舎に無常院という建物がありました。病気でこれは危ないという状態の人を、普通の住居から移すところでした。それとは少し違いますが、聖徳太子が

建てた四天王寺の中には療病院というところがあります。こちらは完全に治療だけです。また、光明皇后はやはり治療の施設である施薬院や、福祉的な目的の悲田院を建てました。このような療病に関する施設というのは、当時までに幾つかありましたが、二十五三昧会が設けたのは療病ではなく、看取りの場でした。

二十五三昧会では、「これは重病になつてきたな、お見送りの準備をしたほうがいいかもしれない」というようなときに、無常院あるいは往生院と呼ばれる建物にその仲間を移します。貴族が自分の家の敷地の北東の方角に、そういう建物を建ててゐるのです。北東というのは昔でいう丑寅うしとらの方角で、いわば鬼門です。死者が向かう方角とされていきました。

たとえば藤原道長は、病気の治療として真言密教のお坊さんおんぶしを呼んで祈禱きとうしてもらつていました。時には陰陽師おんみよじも呼んだようです。しかし最期、もうこれはだめかなと思つたときには、「もう祈禱も陰陽師もいらぬ」といつて、自分は浄土、阿弥陀さまのところに行くからと専用の建物に移つています。源信の無常院や往生院での看取りも、治療する療病院とは完全に分けたところに移して行なわれたのです。

もうこれは最期だ、生き延びるための治療は諦めなければいけないとわかつたときに、無常院とか往生院に移す。ということは、あきらかに移つた時点で考え方を変えるわけです。別の建物に移ることで、本人も否応なく死というものに正面から向き合うことになります。道長に

しても、二十五三昧会にしても、そういった考え方の転換というのは、当時は当たりまえにしていたように感じます。私はそれは非常にいいことだと思えます。

今は病院に入るせいもあって、最後まで病気との闘いで終わりがねません。そうになると、死とは敗北になってしまいます。自然な死が敗北であるはずはありませんが、その辺のことをもう少し、源信に学んでみましょう。

源信は、本の中で建物を移る理由として「執着をなくすためである」と記しています。この世的な興味を湧かせるような、それまでと同じ場所ではいけないとはつきり言っています。いったいそれはどんな場所だったのでしょうか。

「ケガレ」から「聖なる大仕事」へ

往生院または無常院の内部は、香を焚いて花を飾ります。死にゆく人は、まさに死者を莊嚴する道具立てで安らぎが得られる待遇を受けるのです。そして阿弥陀さんのいる浄土のほうを向くようにと、西を向いて寝ます。仏像も置くのですが、仏像の向きは本人と同じでも反対でもよく、両方あるようです。そうして仏さまが右手にもった五色の糸を本人の左手にもたせ、阿弥陀さんに引っぱっていったくというイメージをもちます。とにかく阿弥陀さんは道案内をしてくれる。「山越えの阿弥陀」にあるように、直接的には観音・勢至という二人の菩

薩が使いとしてやってきて、阿弥陀さんのもとに連れていってくれると考えます。

このようにいろいろ整え、仲間たちが念仏を唱える中で、心安らかに死と向き合う。当時そこでは、あきらかにターミナルケアが行なわれていたわけです。

源信によるこのターミナルケアでは、別の場所に移った後、一緒に考え方をもって念仏を唱えながら見送る仲間の存在が非常に大事だと考えられていました。当時のお坊さんの仕事は、人が亡くなったあとのことではなかったのです。

今では坊さんというのは、人が亡くなると忙しくなるといっても困った仕事ですが、その当時はまったく違っていました。『日本書紀』にも「治療に坊さんと呼んだ」という意味の記述がありますが、治療と祈禱が坊さんの主な仕事でした。ですから、ある人が具合が悪いといふときには呼ばれていって身近にいます。亡くなったらもう仕事はありませんから、帰ります。当時は亡くなると呼ばれる葬送夫、あるいは葬送人などといった別な人々がいたようです。

日本人にとっては、死はやはりケガレ（穢れ）でした。ケガレの「ケ」というのは、もともと自己増殖能力のことを指します。頭から生えてくる毛（ケ）もそうですし、大地に生えている木（キ）も、古代は「ケ」でした。気配の気も増殖可能なので「ケ」といいます。この自己増殖能力が枯れてしまうことを「ケ枯れ」、つまりケガレ（穢れ）というふうに考えたわけ

です。

死はケガレの代表的な現象です。それを「死はケガレなのではなくて、聖域に向かうんだ」「聖なる大仕事なのだ」と、見方を大きく転換していくのが平安時代であったかと類推できます。死ぬのも悪くない、と。そして二十五三昧会のように仲間に見送ってもらうことで、より一層、死がまんざらでもないものになっていくわけです。

ところで、源信が浄土教の教えも含めて『臨終行儀』を書いたのち、浄土宗、真言宗、日蓮宗、禅宗と各宗派が臨終行儀というのをもつようになります。それらに共通する興味深い考え方が、命に対する二カ条です。

「むやみに捨てたいと思っではいけない」、これが第一条にあるとすると、第二条に「しかし、命に執着してはいけない」というふうに書かれています。

やけになって早く死のうなどという浅慮を厳に戒めつつ、しかし執着は禁止。この命に対するアンビバレントな考え方のあいだで、我々の命は揺れ動いていくのかなと感じます。

死を道案内する『チベット死者の書』

死んでから行くべきところに導くものということでは、チベットには古典的な『チベット死者の書』というものがあります。これは非常に面白く、人が亡くなっていくときにはいっぺん